
僕とネコと空の3日間戦争

宮 Z

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕とネコと空の3日間戦争

【Nコード】

N3867B

【作者名】

宮Z

【あらすじ】

やっぱり面白くないよりも面白いほうが100倍も1000倍もいいと思うんだよね、僕は。

前日

聞きなれた携帯電話のアラームは、僕に毎朝終わりを告げる。どうしたって朝は来てしまうもので憂鬱でだるい体を持ち上げた。モスグリーンのカーテンから冷たい空気が流れる。

今日もまったくもっていい天気。快晴である。太平洋側は冬場雨が少ない。地理の基本中の基本。

『

「今行くよ、母さん」

』

本当は聞いてなんかいないのに返事を返す僕、100点満点。

てん、てん、てん、と頼りない足音だけが鼓膜にとどく。

いつからだったか、僕はもう世界の音を聞きたくなくなってしまった。そう思ったときから僕の中で言葉はただの音に成り下がった。いや聞きたくもないのだからいいのだけれど。でもいつそのこと、そのただの音も聞こえなくなってしまうばいいのにと臆病者ながら思う。

『

「でもこの間のテスト1位だったし」

『

』

「でしょ？父さん。俺頑張ってるじゃん」

安っぽいコーヒーの香りがリビングを満たす。うるせーんだよ能無し夫婦、と叫びたい。お前らなんて大嫌いだ、と言いたい。けど臆

病者の僕にそんなことできるわけなくて、それっきり会話をしないことが唯一の反抗だった。子供じみていて嫌になる。わかってるさ、ガキの遠吠えだなんて。恥ずかしさはダムのようにコントロールできずに溢れ、食べているものがトーストなのかクロワッサンなのかもわからなくなった。がりがりと飲み込むだけのみこんで、逃げるように家を出る。

冬独特の真っ青な空。気持ちよさそうに、楽しそうに、鳥が鳴いているのを確かに聞いた。今日はじめて耳に入れる音はこれがよかったのにいきなりバカ女のバカ丁寧な猫撫で声。寒気がする。じくじくと酸がかかったように起きぬけから耳が痛かった。空気は痛いほど冷たくてもどこか心地よい。その上、日差しはやわらかだ。通りのでかい家の梅の木のつぼみはほころびはじめている。何ともうららか。何とものどか。そんないつもの冬のーコマに、僕は、信じられないものを見た。

『
』
「おはよ」

『
』
「つつさいな、今日はしてねーよ」

『
』
「屋上」

「まあ、たそがれに？俺ロマンチストだから」

「ばかだーあいつーとか言ってるんだろ？が僕には関係ない。簡単にクラスメイトと「アイサツ」をすませて、屋上に走る、走る、走る。屋上への階段は天国への階段だな、といつも頭をよぎる。というのも屋上へつながらドアがガラス戸で空がよく見える、というだけなのだがそんなことは僕にとっては今どうでもよくて、とにかくいっつに知らせなければ、こんなに面白いことを！」

「そら！」

「おう。お前はいつも元気まんまんだなヤス」

「そら、と呼ばれた彼女はさもけだるげに壁にもたれたまま僕を見上げた。目の下には、くつきりとクマ。髪の色はまだオレンジ色のまま。夏から染め直してないからプリン状態で、しかも目つきが悪い。ただのバカ不良にしか見えないのに前のテストで僕はこいつに大差で負けた。」

「お前が走るなんてめっずらしー」

「っ、だっ、て、」

「まあ落ち着いて汁粉ドリンクを飲め」

「あさ、っから、そんなものが、のめっ、る、か」

「汁粉を馬鹿にするな。ゲーム明けの朝もシャッキリ」

「とりあえず、おれの、話をきけ」

口の中に汁粉を流し続ける彼女に必死で伝える。

鳥のさえずりは、電線のところから聞こえた。あまりにもかわいい声で鳴くもんだから、姿をみたくなかった。色とりどりの観賞用の鳥でも、ありふれている野鳥でもなんでもいい。ただの好奇心だ。目を上げる。青が目には痛い。目を細めて、青と黒い線のコントラストに見惚れる。鳴き声の持ち主はどこにでもいそうな鳥だった。視線をもう少し先に走らせると、そこには――

「人が、空を飛んでいた」

その日は一日中「そいつ」のことが気になってしょうがなかった。ソラも相手にしてくれないもんだから、滅多に行かない図書室なんぞにも言ったりして（いた奴ほとんどメガネだった）、UMAについて調べてみたりもしたが、あんな自由自在に飛ぶヒト（…？モノ…？何か…？）についての記述はもちろんなく、残りの昼休みは「ウォーリーをさがせ！」を読んですごした。メガネの視線が痛かった。あれはテリトリーを主張している目だった。あんな草食動物が何を言ってるんだか、と内心腹立たしく思ったりもしたが無視を決

め込んだ。あの目は嫌いだ。学校、特に教室内で強く光るのだ。お互いがお互いの「グループ」というものを強く牽制し合うのである。外から見れば馬鹿馬鹿しいことこの上ない。ということに彼らは気がつかない。意見が同じだからこそ、僕とソラは月と地球のように一緒にいるのだけだ。

前日（後書き）

もちろんタイトルはぼくらの7日間戦争から。

一日目・午前

今日も、である。聞こえないのだからいいのだ、いいのだけれど、うるさいことには変わらない。うつすらドアを隔てて聞こえるその「音」。声ではない。認識できない。自室のハンガーに手をかけて制服に袖を通す。ヒステリックで耳障り。まだまだ冬であり朝の着替えは億劫だ。

「おい」

ネクタイを結ぶのも1年のころこそ戸惑ったけれどもう慣れたもので、臙脂色のそれを首元にかける。ソラの兄貴のおさがりだった。というか、形見だった。ソラの兄貴は事故で3ヶ月前に亡くなった。それなのに、あんなにフツウなソラはととてもとても強いのだと思う。ぼくなんてペットのハムスターが死んで半年引きずったのに。ソラの兄貴は死ぬ前に、「泰時くんは仲良くな」と言ったらしい。正直、重い。

「泰時」

「泰時！」

「は、」

寒いはずだ。窓が開いていた。その縁に座っていたのは紛れもない昨日のあいつ。しかも、名前を、ぼくの名前を呼んだ。

「う、わあああつ！」

「そんなに驚くなよ。俺らは昨日も会ってたんだから」

「あ、あんなの会ったことに入らないだろ。ていうか俺がちょっと見ただけだし」

「は？何言ってたんだ？会っただろ、えーと、ほら、あそこで、『ガッコウ』で」

「会ってねー！」

「この服お前のガッコウのだろ？」

確かに、目立つ緑のジャージはぼくとソラの通う学校が指定するものだった。その下には謎のロゴのシャツ。便所サンダルを履いてよく窓辺にしゃがめるものだと思う。両腕両脚とも袖をまくっている。だらしない感じで伸びている黒い髪は後ろで束ねてあり、頭には蛍光ピンクのフチの眼鏡。左の胸元には、金色の糸で名前が刺繍されている。『神戸』…こうべ？そういえば、ソラの苗字も神戸……

「お前、頭イイな。もう察したろ」

「…そりやどうも…」

「よし、そうなりや話が早い。やっぱりお前は協力に値する人間だ」

「俺の名前は…ネコとでも呼んでくれ。またあとでな、泰時」

そういうと、そいつは屋根と屋根の間に消えていった。もちろん、

飛んで。あつけにとられて馴染みの青い朝の空を見ていると、母親の怒鳴り声、音がドアを叩いた。

*

そういえば、なんでぼくはさつきあんなに冷静だったのだろうか。しかも、めずらしく本心から話していたような気さえする。とりあえず、こんなに面白いことは共有しなくてはならない。教室の薄ら笑いのトモダチではない、もちろん屋上のソラと、だ。昨日のように、あの階段を駆け上がる。大空が見えてくる。昨日と変わらない、不変を願った。

「ソラ！いるか！」

「どうしたヤス。今日もそんなに急いで。」

ため息に似たなにかが漏れた。よかった。やはりあれは夢だった、気のせいだったのだ。そこにいたのは制服をだらしなく着た、オレ

ンジプリン頭のソラ。いつも通りのだるそうな目とその下にあるクマ。その瞳は、ゆるゆるとぼくを見た。

「ソラ、聞いてくれよ。今日の朝、」

「それよりも俺の話を聞け泰時」

「……………え…?」

「このソラという娘の記憶を探らせてもらったが…モグラに関係することは何一つなかったな。お前の記憶と、兄の記憶。あとは変な数式やら呪文やらちかちかする画面やらだったよ。じゃあ本題に映るが」

「ちょ、ちょちょっと待て」

「なんだ？」

「え、待てよどういうことだよ。全然わかんねえ」

「それを今から説明するんだよ。いいから黙って聞け。」

信じられないことは、2個も3個も続く。見かけはソラなのに、こいつはソラでないのだ。

「いいか。俺―ネコは、ネコであつたネコでない。ソラあつての俺だ。」

「はあ…………」

「寄生虫みたいなもんだよ。俺自身は本当は精神と記憶のカタマリで、体が無いからこの世界にはいられない」

「てことはお前は別の世界からきたのか」

「そういうこつた。問題は俺の世界で起こつた。ある一つのカタマリがこつちを乗っ取りにかかつた。そいつが、『モグラ』。」

ソラの姿でこんなに小難しいことを喋るから、なんだか深刻なのに可笑しかった。リアリティーがない。ペラペラで、チープな物語だ。

「そいつは、ある人間の体を手始めに乗っ取った。だが、そいつが強かったせいで完全にはできなかった。」

「その人間って」

「ソラだ。俺が使ってるこの体は半分のソラ。ソラ自身の密度が半分で低かったから俺は自由に姿を変えられたんだ。この辺の地域で他の奴の体は使えるほど精神が強くなかったよ」

「え、じゃあもうモグラはその辺に潜んでんのか」

「そうだ。それに、半分のソラはいくら精神が強くても俺たち異世界の者の寄生に耐え切れない。…おそらく、3日が限度だ。」

「3日……」

今日と明日とあさって。3日なんてそんなものだ。そんなもので、ソラが、この世界から消えてしまふ。消える。物語ではないのだ、これは。現実だったのだ。ソラの兄貴のように、あのハムスターのように、いなくなって二度と新しい表情を見ることがなくなってしまふ。その2つは突然やってきたが、これは「その時」がちゃんとわかってる。

それならすることは1つじゃないか。

ぼくのキャラではない。でも、なりふり構ってられない。

「おれはソラを消させない。モグラにこの世界を乗っ取らせるのもごめんだ」

「よし。じゃ、ヤス、頼むぞ」

皮肉にも、この日の空もきちんと青かった。そして、その不変さが安心できて、羨ましくて、少し、いや大いに恐ろしかった。なぜなら、嵐の前には水面ひとつ遊ばないという相場が決まっているからだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3867b/>

僕とネコと空の3日間戦争

2010年10月10日05時22分発行